

A Tree of Last year

A tree and a bird were really good friends. The bird was singing on the branch of the tree all the day, while the tree was hearing the bird singing all the day.

The cold winter was coming nearer, so the bird had to depart from the tree.

“Good-by, Miss bird. Let me hear your song again next year.” said the tree.

“Please look forward to me.” saying so, the bird flew toward the south.



Spring came again. The snow in the fields and mountains disappeared.

The bird came back to her friend, the tree she had left the previous year.

“What’s the matter with the tree?” There was no tree but the root of the tree.

“Where did the tree go?”

The bird said to the root.

The root said to her,

“A woodman cut down the tree and carried it toward the valley.”

She flew toward the valley and found a big factory. She heard wood cut with a saw.

The bird flew down on a gate of the factory and said to the gate,

“Mr. Gate. Do you know what happened to my friend tree?”

“The tree was chopped into small pieces and sold to the village over there as a match.”

The bird flew toward the village.

She found a girl beside a lamp and said to her,

“Hello, do you know a match?”

The girl said,

“The match was burned, but the fire lit by it is glittering now.”

The bird stared at the fire in the lamp.

She sang the song she had sung the previous year. The fire looked so pleased, swinging the flame.

She finished singing and stared at the lamp fire for a while. Then she flew away somewhere. (2023.2.5 Kudo: Original by Niimi Nankichi)

去年の木

新美南吉

一本の木と、一羽の小鳥とは大変仲良しでした。小鳥は一日その木の枝で歌をうたい、木は一日中小鳥の歌をきいていました。

けれど寒い冬が近づいて来たので、小鳥は木から別れて行かねばなりませんでした。

「さよなら。また来年きて、歌を聞かせて下さい。」

と木は言いました。

「え。それまで待っててね。」

と、小鳥は言って、南の方へ飛んで行きました。



春がめぐって来ました。野や森から、雪が消えていきました。

小鳥は、仲良しの去年の木の所へまた帰って来ました。

ところが、これはどうしたことでしょう。木はそこにありませんでした。根っこだけが残っていました。

「ここに立ってた木は、どこへいったの。」

と小鳥は根っこに聞きました。

根っこは、

「木こりが斧で打ち倒して、谷のほうへも持っていつちやったよ。」

と言いました。

小鳥は谷のほうへ飛んで行きました。

谷の底には大きな工場があつて、木をきる音が、びんびん、としていました。

小鳥は工場の門の上にとまって、

「門さん、わたしの仲良しの木は、どうなったか知りませんか。」

と聞きました。

門は、

「木なら、工場の中で細かくきりきざまれて、マッチになってあつちの村へ売られていったよ。」

と言いました。

小鳥は村の方へ飛んで行きました。

ランプのそばに女の子がいました。

そこで小鳥は、

「もしもし、マッチをご存じありませんか。」

と聞きました。

すると女の子は、

「マッチは燃えてしまいました。けれどマッチのともした火が、まだこのランプにともっています。」

と言いました。

小鳥は、ランプの火をじっとみつめておりました。

それから、去年の歌を歌って火にきかせてやりました。火はゆらゆらとゆらめいて、心から喜んでいるようにみえました。

歌を歌ってしまうと、小鳥はまたじっとランプの火をみていました。それから、どこかへ飛んで行ってしまいました。